

第39回日本皮膚悪性腫瘍学会 学術大会を開催して

(2023年8月4・5日)

※名古屋国際会議場と一部Web配信のハイブリッド開催

中村 元樹

名古屋市立大学大学院医学研究科加齢・環境皮膚科学准教授

はじめに

第39回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会は、2023年8月4・5日にわれわれ名古屋市立大学加齢・環境皮膚科が主管となり、名古屋国際会議場で開催しました。5月8日から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、さまざまな規制が緩和されてから初めての日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会となり、Web配信は一部会場のみとし、一般演題も含め、座長・演者の先生方には基本的には現地参加をお願いし

ての開催でしたが、事務局では台風等の災害がおこらないことを祈るばかりでした。結果、天候に恵まれ連日35℃を越す暑さでしたが、総参加者数708名、現地参加者数509名と多くの方にご参加いただき、盛会のうちに終えることができました。

multidisciplinary なアプローチ

テーマとして掲げた「MULTIDISCIPLINARY APPROACH FOR SKIN CANCER」は、皮膚悪性腫瘍に対する多専門的、集学的なアプローチを意味します(図1)。本会のプログラムにも、会長の森田明理教授、事務局長の加藤裕史准教授とともに、それぞれが得意とする分野を統合して、いま現在考えるかぎりの多角的な視点を盛り込みました。診断においては画像検査、病理、ダーモスコピー、治療では手術、放射線、薬物、骨髄移植、緩和ケア、そして臨床研究や治験、基礎研究では癌免疫、腫瘍微小環境、バイオマーカー、iPS細胞など、固形癌からリンパ腫までを幅広くカバーするプログラムを組むことができました。このプログラムの充実には、皮膚科の先生方はもちろん、形成外科をはじめとした他分野の先生方にも多大なご協力をいただき、それこそが本会の成功につながったと思います。この場を借りて厚く御礼申し上げます(図2)。

collegiality の構築

ハイブリッド開催にすることで一気に膨れ上がる予算と、計画の段階ではどのような状況になる



図1 大会ポスター



図2 名古屋市立大学加齢・環境皮膚科学のスタッフ一同

か予測がつかなかった新型コロナウイルス感染症の動向を鑑みて、本会では全体での懇親会は開催しませんでした。しかしその代わりに、8月3日の評議員会後に前夜祭的な食事会を開催し、翌8月4日には“Young Collegiality Night”と銘打って中堅の先生方にアテンド役になっていただき、若手医師たちと7～8名ずつのグループに分かれて名古屋の夜の街を楽しんでいただきました。両会とも大いに盛り上がり、コロナ禍で失われていた大学や施設の枠を超えた縦横のつながりの再構築に一役買ったのではないのでしょうか。本会では会場のいたるところで「久しぶり～」の声が聞こえ、現地開催・リアル参加の重要性を再認識することができました。

皮膚悪性腫瘍診療・研究のこれから

私はまだまだ若輩者ですが、それでも私が皮膚悪性腫瘍の分野に足を踏み入れた当時と比べると、現在の治療選択肢の多さ、可能なアプローチの多様さには隔世の感があります。大きな変化はやはり分子標的薬と免疫チェックポイント阻害薬の登場であり、徒手空拳で皮膚悪性腫瘍に挑んでいたわれわれの大きな武器になりました。またそれらの治療薬開発につながった癌ゲノム、癌免疫の輝かしい研究成果は、その産物がわれわれの手に届

くことで、研究の大切さ、必要性を教えてくださいました。しかし悪性黒色腫から始まった免疫チェックポイント阻害薬治療はあっという間にほかの癌種に広がり、遥かに多い症例数、研究者数から、併用療法などのstudy・実用化ではすっかり追い抜かされています。また、共通するゲノム変異や免疫療法の標準化により、臓器の垣根を超えた癌治療が始まりつつあります。果たして10年後、20年後にもわれわれ皮膚科医は皮膚悪性腫瘍治療を自分の手で行えているのでしょうか？ 本会で結集した皮疹をみる力、ダーモスコピー・病理を読む力、整容面にも配慮した切除・再建の圧倒的な技術、皮膚科医ならではの視点による研究力を大いに発揮し、腫瘍内科医や他科の医師に「やはり皮膚悪性腫瘍を扱うのは皮膚科医でなくては！」といわしめるよう励んでいかなくてはと思います。志を同じくする仲間たちと再会し、たくさんの専門家たちの話を聞き、そんな思いを抱いた会でした。